

あいさつ

豊田市矢作川研究所 会長

鈴木 公平 (豊田市長)

平成6年7月に豊田市矢作川研究所が発足して5年半が経過します。ここに所報の第4号を発刊することができました。これも偏に、ご協力を賜った共同研究員の皆様、地元の調査会や愛護会の皆様、そしてご指導、ご配慮を賜った国、県等の関係機関の皆様のお陰であり、心から御礼申し上げます。

研究所自体はささやかな体制ではありますが、ご協力いただく共同研究員の皆様は多彩となり、それぞれすばらしい研究を重ねていただいています。

さて、今年(平成12年)の1月14日の中日新聞で愛知万博に対するBIEの懸念が報じられました。その後の経過についても皆様ご承知のとおりですが、「自然環境の保全」に対する国際的な認識について、改めて考えさせられました。

また、昨年5月の海上の森のオオタカ問題を始め、このところオオタカへの関心が急に高まっています。元々人の生活の場に比較的近い生息圏の鳥であり、危惧種に指定された希少な鳥ですが、どうも実態がよくわからない、あるいは伝えられていないという感じを受けます。

オオタカに限らず、現代人の日常の暮らしと自然との直接的なつながりが減り、関心が薄らいできた結果として自然界がどういう状態にあるのかわからない、あるいは知らない人が増えていると思います。このことが、自然環境保全に係る根源的な問題ではないかという気がします。

当研究所は、地元の矢作川天然アユ調査会のご協力をいただいています。会員の皆様は昔から矢作川にたいへんな関心を持っており、川や水源の森で起きている様々な変化について実にすぐれた観察眼をもっています。長年にわたる観察者と専門の研究者が協力することでの確かな問題把握ができ、それが効果的な調査研究につながり、やがて問題解決策が見えてくるものと思います。

自然界で起きている変化は、様々な要因が複雑にからみ合った結果であり、これを研究者だけで解明することはとても困難だと思います。より多くの人々が日常的、継続的に観察を続け、その多数の情報を蓄積、分析し、科学の眼で整理するという取り組みが必要です。より多くの観察者をつくるには、自然のもつすばらしさを知っていただくことが大切であり、そのためには身近な自然のなかでのドラマを説明できる体制が必要だと考えます。当研究所では、これからも矢作川流域の自然を大切にす諸団体、諸機関、研究者等の皆様と力を合わせて、調査、研究、啓発活動をしてまいりたいと思います。